

〈研究ノート〉

井上立士年譜・書誌稿

井上立士（一九一二～一九四三）は、昭和戦前期に『青年芸術派』などで活躍し、大戦末期に夭折した小説家であるが、今日では知る人も少ない。のち陸軍中將となった父が天津市に住した折に生まれ、京都市伏見区でも暮らした。作風は青年の恋愛心理を探究したもので、二つの代表作「もつと光を」「男性解放」は当局から発禁処分を受けた。

井上について筆者は嘱託研究員として二〇〇五年九月二三日の仏教大学総合研究所「京都における日本近代文学の生成と展開（基礎研究）」班の第八回研究会において「井上立士の文学―小伝と「休止符！」―という題で、京都を舞台とする井上最初の短編小説「休止符！」（32年12月『今日の文学』）と伝記事項をめぐる発表をした。日本近代文学会関西支部編『滋賀近

外 村 彰

代文学事典』（和泉書院、近刊）でも井上の項目を担当していた縁で、年譜や書誌もまとめてみた。今回は不完全ながらそれらを掲載する。

井上の経歴には未詳事項が多い。生れた月日、幼少期に住んでいた場所、学歴、作品の数などもこれまで不明であった。また「立士」の読みも混乱していた。戸籍上では「たつし」だが本人は立士が本名だと称し、刊本の奥付には立士と記されていた。生前の文献に「たつし」「たつお」のルビがないため筆名は「りっし」で統一すべきであろう。

調査にあたっては桑名市にご健在の実弟・井上正士氏、伏見区にご健在の実妹・井上三以子氏、また本家（京丹後市網野町島津）の井上直己氏、正太郎氏をはじめ、多くの方々のお世話

になった。本家に残されてあった父・井上政吉自筆の「陸軍中将正三位勲四等功三級井上政吉略歴」をベースにして年譜は作成してある。また三重県立図書館の地域資料コーナーにある田村泰次郎文庫（特別資料）には井上の田村宛書簡が現存していたため、井上の肉声を知る資料として抄録しておくこととした。

内容は「年譜・書誌稿」「書誌・著述稿」「井上立士書簡抄」「参考文献稿」に分けた。向後は諸家からの新たな情報のご教示をお願いできればと思う。

年譜・書誌稿（太字は井上立士の関連事項）

- ・明治一九年
井上政吉、一月一八日、京都府竹野郡島津村^{そんしまみぞかわ}字島溝川^{しまみぞかわ}四七番地（現・京丹後市網野町）に生まれる。本家は二〇〇年続く酒造業。母・初音は明治二四年一月四日、福井県生まれ。
- 政吉、私立成城学校、東京陸軍地方幼年学校を経て明治三六年七月に陸軍中央幼年学校本科入学。同窓に中島欽蔵（のち参謀次長）、阿南惟幾^{これちか}（のち陸軍大臣）がいた。翌年一月卒業、歩兵第九連隊に配属。一二月、陸軍士官学校に一八期生として入校。明治三八年一月二五日同校を卒業。
- ・明治三九年
六月二六日、政吉、大津市の陸軍歩兵第九連隊第一中隊に歩兵少尉として赴任。同連隊第二七代旗手少尉となる。明治四一年一二月二一日、政吉、陸軍歩兵中尉に昇進。
- ・明治四五年 当歳
三月一九日、立士、大津市^{かみで}神出町（現・三井寺町）に生まれる。戸籍では本籍地の京都府竹野郡島津村^{そんしまみぞかわ}字島溝川^{しまみぞかわ}四七番地（現・京丹後市）での出生。
- ・大正二年 一歳
一二月二六日、政吉、千葉県千葉郡都賀村（現・千葉市稲毛区）の陸軍歩兵学校に教導大隊附として赴任、移住。
- ・大正五年 四歳
五月二日、政吉、大津市の陸軍歩兵第九連隊に陸軍歩兵大尉・第八中隊長として赴任、移住。同年八月二六日、次男・^{まさし}正士、大津市本町に生まれる。
- ・大正七年 六歳
八月一二日、三男・^{しょうぞう}正三、大津市神出町に生まれる。一〇月二五日、政吉、仙台陸軍幼年学校生徒監に着任、同市に移住。
- ・大正一二年 一一歳
四月、宮城県立仙台第一中学校（現・仙台第一高校）に入学。八月六日、政吉、仙台陸軍幼年学校生徒監主事・陸軍歩

兵少佐に昇進。

・大正一三年 一二歳

三月一五日、政吉、京都市伏見区の陸軍歩兵第三八連隊に赴任、移住。京都府立第二中学校（現・鳥羽高校）に転校。

・大正一四年 一三歳

五月一日、政吉、奈良市に異動した第三八連隊の大隊長に着任、移住。県立奈良中学校（現・奈良高校）に転校。

・大正一五年 一四歳

四月一日、東京陸軍幼年学校に入校（第三十期）。

・昭和二年 一五歳

三月一日、政吉、陸軍歩兵第九連隊に赴任、京都府師範学校に配属されて教練指導。北区上賀茂に移住（立士、休暇中同地に帰省）。

・昭和三年 一六歳

三月一日、政吉、陸軍歩兵中佐に昇進。

・昭和四年 一七歳

三月、東京陸軍幼年学校卒業。四月、陸軍士官学校予科に入校。一〇月、同校を肺炎患のため退校。

・昭和五年 一八歳

八月五日、政吉、三重県久居町（現・津市）の陸軍歩兵第三三連隊に赴任（留守隊長）、移住。

・昭和六年 一九歳

第二早稻田高等学院入学。都内の浜松町に下宿し、二級上の田村泰次郎、同級生の永山三郎らと親交。モーパッサンやラディゲを愛読した。

・昭和七年 二〇歳

『今日の文学』同人となり十返一（肇）らを知る。一二月、同誌に「休止符！」。

・昭和八年 二一歳

一月一日（昭和七年十二月三十日）長女・三以子生まれる。三月『今日の文学』に「不寐なる棲息者」。早稲田大学文学部独文科に進むが中退。八月一日、政吉、陸軍歩兵大佐に昇進・津連隊区司令官に着任、同市に移住。八月、加宮貴一の主宰する『今日の文学』に「僕のステップ」。この頃名古屋新聞東京支社に勤務、のち青山青年会館会報の編集にも従事。また龍胆寺雄らの『ROMAN』同人となった。

・昭和一〇年 二三歳

三月一五日、政吉、名古屋市の陸軍歩兵第六連隊に連隊長として赴任。四月、石川達三らの『星座』に一二年まで同人参加。七月『レッツエンズ』に「ダンサー・アラモード」。

・昭和一一年 二四歳

三月二十八日、政吉、東京都の近衛歩兵第三連隊長に着任。
四月一日、正士、陸軍士官学校予科入校。

・昭和十二年 二五歳

三月一日、政吉、陸軍第五師団司令部に赴任、旧広島陸軍幼年学校にて仙台陸軍幼年学校の開校準備にあたる。四月一日、政吉、仙台陸軍幼年学校校長に着任。八月一日、陸軍少将に昇進。

・昭和十三年 二六歳

五〇七月『新公報』の編集に携わり高見順に師事。『新大衆』編集を経て通文閣に勤務。ほかに『セルパン』『新文化』の編集にも加わり、代々木山谷の南賀台アパートに独居しながら創作を続ける。一月五日、政吉、鹿児島陸軍歩兵第三六師団に師団長として赴任。

・昭和十四年 二七歳

二月一三日から政吉、日中戦争に応召。南昌作戦に参加、以後九月二八日まで武寧、漢口、大連を転戦。一〇月二日、関東軍司令部に陸軍中將として赴任。一月六日、第二三師団長に着任。

・昭和十六年 二九歳

三月、野口富士男・船山馨・十返一・田宮虎彦・南川潤・牧屋善三・青山光二と『青年藝術派』を結成、三月一日、政

吉、参謀本部に着任。同月二〇日に東京帰着、四月三〇日に予備役となる。四月、単行本形式の同人誌『青年藝術派・新作短篇集1』『明石書房』に「男女」を発表。四月二六日（五月二九日）、正三、満洲国牡丹江上空にて演習中、搭乗機「隼」が軽爆と衝突し殉職（大尉に昇進）。享年二二歳。七月一九日、政吉、満蒙開拓青少年義勇軍（初代）訓練本部長となり八月中旬に満洲国新京に移住。八月『新創作』に「華燭」。十二月、『青年藝術派新作集 八つの作品』（通文閣）に「もつと光を」。同月、青年藝術派叢書の書き下ろし長編『男性解放』（通文閣）刊行。

・昭和十七年 三〇歳

一月『男性解放』、二月『青年藝術派新作集 八つの作品』が内務省警保局の検閲により発禁処分となる。この年『文芸新潮』同人。二月『早稲田文学』に「兎と亀」、『新創作』に「魔笛」。六月『青年芸術派新作集 私たちの作品』（豊国社）に「花嫁」。一月『新創作』に「秘唱」。

・昭和十八年 三一歳

四月『現代文学』に「ぐずべり」。八月『辻小説集』（八紘社杉山書店）に「黒船」。夏、高見順を長野の発喃温泉に訪ね、不在のため帰京したが疲労が原因で粟粒結核に罹り静養。六本木の額田病院に入院後の九月一七日、享年三一歳で

急逝。一九日葬儀、高見が弔辞を読む。十一月『新創作』に
十返・野口、十二月『現代文学』に南川・三雲祥之助・丹羽
文雄の追悼文が掲載。墓所は東京都府中市多摩霊園「井上家
之墓」20区1種18側12番。正三の墓碑の後方に立士の墓碑を
建立。法名「立正院禅岳慧定居士」。一〇月、初音、三以子
が東京から新京に移住。

・昭和一九年 歿後一年

二月、書き下ろし長編『編隊飛行』（豊国社）刊行。九月、

『編隊飛行』が第一回航空朝日航空文学賞を受賞。

・昭和二〇年 歿後二年

四月五日、政吉、陸軍戸山学校長に着任、東京に移住。八
月一二日、津連隊区・津地区司令官となり津市に移住するも
敗戦により一〇月五日召集解除。昭和二年六月一七日、正
士（少佐）が大陸より復員。一〇月二〇日、初音、三以子が
北朝鮮での一三カ月にわたる抑留から脱し帰国。

・昭和二二年 歿後四年

一月三日、正士、戸島悦子と結婚。昭和二三年、井上家
は悦子の出身地・長崎県大村市に移住。十一月、正士、朝日
生命に就職。

・昭和三三年 歿後一五年

四月、井上家は京都市伏見区桃山町に移住。

・昭和三八年 歿後二〇年
八月一日、初音、癌で死去（享年七二）。

・昭和五〇年 歿後三二年

四月七日、政吉、老衰で死去。（享年八九）。

書誌・著述稿（巻号数の「第」を省略、以下同）

・短編「休止符！」『今日の文学』二巻一・二号、昭七・
一二・一 五七〜六二頁

・短編「無縁なる棲息者」『今日の文学』三巻三号、昭八・三・
一 四七〜五三頁

・短編「僕のステップ」『今日の文学』三巻八号、昭八・八・
一 八五〜八七頁

・随筆「ジャアナリズムの問題」『星座』一輯、昭一〇・四・
一 九七〜九八頁

・随筆「作家の保護色と警戒色」『星座』二輯、昭一〇・五・
一 五五〜五六頁

・短編「ダンサー・アラモード」『レゾエンゾ』五年七号、昭
一〇・七・一 二〇〜二二頁

・随筆「菊池寛氏の作品を読みて」『星座』八輯、昭
一〇・一一・一 五二〜五三頁

・短編「足跡」『星座』九輯、昭一〇・一二・一 七三〜九五

頁

- ・随筆「龍胆寺雄氏に訴ふ」『星座』一〇輯、昭一一・一・一頁未詳 未見*
- ・「編輯記」『新公報』一卷一号、昭一三・五・一 一二四頁
- ・「編輯記」『新公報』一卷二号、昭一三・六・一 一二二頁
- ・「編輯記」『新公報』一卷三号、昭一三・七・一 一二六頁
- ・短編「男女」『青年芸術派新作短篇集1』明石書房、昭一六・四・五 二五〇五二頁
- ・短編「華燭」『新創作』三卷八号、昭一六・八・一 一九八〇一二四頁
- ・随筆「会話の文章」『日曆』二二号、昭一六・一〇・一 四一頁
- ・中編「もつと光を」『青年芸術派新作集 八つの作品』通文閣、昭一六・一二・一 二八七〇三七八頁
- ・長編『男性解放』通文閣、昭一六・一二・二五（青年芸術派叢書）全二四八頁
- ・短編「兎と亀」『早稲田文学』九卷二号、昭一七・二・一 七二〇九〇頁
- ・短編「魔笛」『新創作』四卷二号、昭一七・二・一 九九〇一一八頁
- ・書評「高見順著 諸民族」『新創作』四卷四号、昭一七・四・一 四四頁
- ・随筆「『悪霊』の意味のひとつ」『現代文学』五卷六号、昭一七・五・二八 三九〇四〇頁
- ・書評「新田潤著 姉妹」『新創作』四卷六号、昭一七・六・一 一六八〇六九頁
- ・短編「花嫁」『青年芸術派新作集 私たちの作品』豊国社、昭一七・六・二〇 二五三〇二九九頁
- ・書評「南川潤著 昔の言葉」『新創作』四卷八号、昭一七・八・一 一一六頁
- ・短編「秘唱」『新創作』四卷一号、昭一七・一一・一 五一〇六八頁
- ・葉書回答「一 今年度の優秀作品は！ 二 新人への希望」『新創作』四卷一二号、昭一七・一二・一 三七頁
- ・書評「三雲祥之助著『ジャワ日記』」『現代文学』六卷三号、昭一八・二・二八 三四〇三五頁
- ・短編「ぐずべり」『現代文学』六卷五号、昭一八・四・二八 六一〇七〇頁
- ・随筆「文学の危機」『早稲田文学』一〇卷五号、昭一八・五・一 四二〇四三頁
- ・随筆「懺悔に關して」『新創作』五卷四号、昭一八・七・二〇 一九〇二三頁

・随筆「ひとつの課題」『若草』一九卷八号、昭一八・八・一
一四頁

・短編「黒船」『辻小説集』八紘社杉山書店、昭一八・八・
十八 三五頁

・長編『編隊飛行』豊国社、昭一九・二・二五 全二八五頁
〈再掲作〉

・「華燭」『現代文学代表作全集第四卷』万里閣、昭二四・一・
二五 二九七～三二六頁

・「もっと光を」『統発禁作品集』北辰堂、昭三二・七・一五
五～六一頁

・「編隊飛行」『全集・現代文学の発見・第十四卷 青春の屈折
上』学芸書林、昭四三・七・一〇 三七五～四三二頁（全
一五章のうち第七章「旋回」以降を掲載）

井上立士書簡抄（田村泰次郎宛）

○昭和一六・三・二〇付より

自分の二十代を振り返って、女に煩はされたその十年にぞつと
してゐます。私は女から男を解放しなければならぬといふ一
寸した気持ちから、私達の二十代を懺悔する「男性解放」といふ
長篇を書き始めてゐます。又この頃泌々感ずるのは、私達青年
の敵は年老けた男達であるといふことです、この問題はどうし

ても書きたい、これをやつつけなければ、日本の性道徳は救は
れない。性の新体制が行はれなければ、社会の進歩はないと思
ひます。（中略）私の青年芸術派の短篇集の作品は、ふじ子の
思ひ出からヒントを得て書きました。あなたに御迷惑はかけて
ない積りですが・・私達に自体が、あの場合のあなたの立場の
男に向つてあふれてゐますが、作品をお読みになるときにな
れば許して下さい、一つの懺悔です。話は全く作つたものです
し、（後略）

○昭和一六・五・一二付より

青年芸術派は季刊としては出せません。（内ム省の注意で）春
秋二回だけ許すといふことになりましたので、次は秋に九月頃
です。（中略）「男女」は悪くも云はれましたが、他の文学的
経歴の私よりはずつと秀でた人々と並んで、それほど見劣りが
しなかつた、私なりに出来てゐて、私がこの人々と一緒にやる
ことが大変な背延びではないと思つてもらへたことで安心しま
した。割合に多くいいと云つてくれた人々もあります。

○昭和一六・一二・六付より

小生の弟が、その愛する戦闘機と共に二十四才の人生を終つて
以来、なにかと私事ながらそのうちに夏が終り秋になりあなた
に手紙を書きたいと思いながら、仕事にも追はれて、今日に至
つてしまいました。

同人雑誌は統合により八つになりました。私は文芸主潮といふのにはいつて居ります。

○昭和一七・四・一九付より

「八つの作品」を読んで下さった由、あれは私自身でも、もうちよつと書けないかも知れませんが、情熱的にも、至つて下手な小説、小説らしくない小説ですが、多人の人々が面白いと云つて呉れました。しかし、時代は私などの時代ではありません。

あなたには想像もつかないやうな世相を呈して居ります。私たち仲間はそのなかで頑張らうとは言つて居りますが、ことに私などはこの世に容れられさうありません、八人の叢書が最新刊の私の「男性解放」は不完全ながらもいくらか認められたのですが、発禁になりました。

こういうわけで私の前途はまことに暗澹としてゐます。私が永い間身につけて来たものは役になつて居ないのです。淋しい気がします。しかしどこかに血路をみつめて書いてゆきます。昨年、三百枚の長篇と百三十枚の中篇と、五十枚の短篇二つを書きました。今年も短篇集（青年芸術派の）を近く出しますし、長篇もやることになつて居ります、皆よくやります、怠けものの私も大いに鞭うたれて居ります。

○昭和一九・一〇・二八付より

純文学畑の道で頑張る連中は困つてゐます。僕の小説などは特にいけないらしいです。今年はそれでもかりの仕事は、二月に新創作と早稲田文学、それに五月に青年芸術派の短篇のと短篇三つです

長篇を出すことになつたのですが、とても書きにくくて弱つてゐます。とにかく文学は依然として私にとつては容易な道ではありません

十一月号は新創作、それに十二月号に知性のを書きました、これはまだ出ません、書きたいものが書けなくて弱ります。至つて元気ながらこの頃は銀座も全く面白くなく、あまり出ません、

参考文献稿

- ・石川達三「男と遊ぶ女」『雄弁』二九卷三号、昭一三・三・一三七九〜三八三頁
- ・江間道助「文芸時評」『早稲田文学』九卷三号、昭一七・三・一三八頁（兎と亀）
- ・十返一「文学の新時代（文芸時評）」『新創作』四卷三号、昭一七・三・一五〇頁（魔笛）
- ・大井広介「文芸時評―非論理的―」『現代文学』五卷一号、昭一六・一二・二八 一二四頁（もつと光を）
- ・水盛源一郎「新刊書評 青年芸術派新作集『八つの作品』」『早稲田文学』九卷三号、昭一七・三・一 四一〜四二頁
- ・南川潤「わが文学的交友録」『現代文学』五卷一二号、昭一七・

- ・十一・二八 四〇〇四二頁
- ・無署名「文筆家総覧」日本文学報国会編『文芸年鑑二六〇三年版』桃蹊書房、昭一八・八・十二二六頁
- ・十返一「十年の友 井上立士と僕」『新創作』五卷六号、昭一八・一一・一〇 四〇八頁
- ・野口富士男「居室と衣服―井上立士君のこと―」『新創作』五卷六号、昭一八・一一・一〇 八〇二頁
- ・船山馨「送歳記」『新創作』五卷六号、昭一八・一一・一〇 五〇頁
- ・南川潤「井上立士君のこと」『現代文学』七卷一号、昭一八・一二・二八 四〇〇四二頁
- ・三雲祥之助「井上立士君の追憶」『現代文学』七卷一号、昭一八・一二・二八 四二〇四五頁
- ・丹羽文雄「井上立士君を憶ふ」『現代文学』七卷一号、昭一八・一二・二八 四五〇四七頁
- ・大井広介題なし『現代文学』七卷一号、昭一八・一二・二八 六三頁
- ・無署名「航空朝日航空文学賞」昭和十八年度作品入選発表『航空朝日』五卷九号、昭一九・九・一 二三頁
- ・平野謙「遺著ふたつ」『知識人の文学』近代文庫社、昭二三・一〇・一 一七八頁
- ・十返肇「解説」『現代文学代表作全集第四卷』万里閣、昭二四・一・二五 三七二〇三七五頁
- ・高見順「昭和文学盛衰史第二部（十二）第八章『新風』前後」『文学界』一〇卷一号、昭三一・一一・一 一四七頁
- ・小田切秀雄「解説」小田切秀雄編『続発禁作品集』北辰堂、昭三二・七・一五 二四三頁

- ・田村泰次郎「銀座周辺」『わが文壇青春記』新潮社、昭三八・三・二〇 一五四〇一五七頁
- ・井上政吉「陸軍中将正三位勲四等功三級井上政吉略歴」（昭三九・一〇・九作成）
- ・高見順「高見順日記第二卷ノ上」勁草書房、昭四一・三・二五 四二八〇九頁
- ・高見順「高見順日記第二卷ノ下」勁草書房、昭四一・五・一〇 六〇六〇七、六一四〇五頁
- ・無署名「いのうえ・りつし」『月報8』八木岡英治編『全集・現代文学の発見・第十四卷 青春の屈折上』学芸書林、昭四三・七・一〇 三七五、七頁
- ・野口富士男「隣の椅子（10）傷だらけ―井上立士君のこと―」『風景』一二卷一〇号、昭四六・一〇・一 一六〇一七頁
- ・紅野敏郎「昭和十年代文学に関する一考察（下）」『新創作』青年芸術派『新文学』をめぐって―『文学』四〇号、昭四七・七・一〇 九〇〇一頁（再録「野口富士男・椎名麟三・船山馨ら『新創作』前後」『昭和文学の水脈』講談社、昭五三・一・二五 三九七〇三九九頁）
- ・全国拓友協議会編『写真集 満蒙開拓青少年義勇軍』家の光協会、昭五〇・二・一
- ・内務省警保局編「禁止出版物目録（昭一七・一〇・三）」『禁止単行本目録Ⅲ 発禁本関係資料集成第3輯』湖北社、昭五二・二・一五 二六頁
- ・内務省警保局編「単行本処分目録（昭一六・一〇・一八）」『単行本処分目録 発禁本関係資料集成第4輯』湖北社、昭五二・五・一〇 九九頁
- ・野口富士男「井上立士」日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典第一巻』講談社、昭五二・一一・一八 一五三頁

- ・山本春一「文士二人」東幼史編集委員会編『東京陸軍幼年学校史 わが武寮』東幼会、昭五七・一〇・一五 五八六頁
- ・野口富士男「昭和十年代の様相」『感觸的昭和文壇史』文芸春秋、昭六一・七・一五 二二二～二三七頁
- ・山本洋「井上立士」『滋賀の文人〈近代〉』京都新聞社、平一・三・三〇 八三～八四頁
- ・河野仁昭「文学者群像」河野仁昭編『ふるさと文学館第二九巻 滋賀』ぎょうせい、平七・四・一五 六二三～四頁
- ・紅野敏郎「逍遙・文学誌(86)『星座』(上)」『国文学』四三巻九号、平一〇・八・一〇 一六二～五頁
- ・紅野敏郎「逍遙・文学誌(88)『星座』(下)」『国文学』四三巻一一号、平一〇・一〇・一〇 一六二～五頁
- ・無署名「井上立士」日外アソシエーツ編『作家・小説家人名事典』日外アソシエーツ、平一四・一〇・二五 九一頁

追記 本稿の作成にあたっては、熊幼会事務局の大谷清明氏、蔵野信三郎氏、(財)偕行社の戸塚新氏、塚田勝郎氏、越谷市立図書館(野口富士男文庫)の小勝智子氏、三重県立図書館地域資料コーナーの鈴木昌司氏、京丹後市立郷土資料館の吉岡英一氏、そして井上立士の弟妹である井上正士氏、三以子氏、さらに本家の井上直己氏、井上正太郎氏からのご協力をたまわった(所属は調査当時のもの)。各氏には深く御礼を申し上げます。

(トノムラ アキラ 嘱託研究員)